

2012 京都文書からみたオレンジプラン

～かなえられた私たちの思い 五年後の十二の成果指標～



2013年2月17日

第2回京都式認知症ケアを考えるつどい実行委員会

2012 京都文書からみたオレンジプラン

導入

本日の第二回京都式認知症ケアを考えるつどいとは、昨年 of 第一回つどいと連動したものであり、この時期の開催は京都式オレンジプランの策定を直接の契機とします。タイトルにある「2012 京都文書からみたオレンジプラン」とは、「認知症を生きる人たちからみたオレンジプラン」を検討する作業を意味しますが、昨年 of つどいと今回のつどいとの間に流れた一年という時間は、認知症ケアの風景に地殻変動と言ってもよいほどの劇的な変化をもたらしました。まずこの一年の変化を整理するところから始めます。

2012 年 2 月 12 日、粉雪が舞う厳寒の京都。会場となった同志社大学寒梅館へと向かう人の流れは途切れることなく続き、烏丸通りへとあふれる長い人の列が形成されました。この日開催された「京都式認知症ケアを考えるつどい」とは、「京都の認知症医療とケアの現在」をディスカッションし、「認知症を生きる彼・彼女から見た地域包括ケア」に言葉を与えることを目的とした試みでした。

つどいは、京都というローカルなエリアを舞台にした小さな物語に過ぎません。しかし、京都府という行政単位全体を対象にしたということと、「認知症を生きる人から見た地域包括ケア」に言葉を与えようとしたということの二点において、歴史的な時代の流れと連動し、時空を越えた「普遍性」を獲得する可能性がありました。その瞬間を言葉にしてつかまえようとした「2012 京都文書」とは、京都の認知症ケアの確立に向けた一つの始まりであり、未来に向けた「未完の書」としての宿命を帯びます。昨年 of つどいの最後、京都文書が 1,000 人の拍手で採択された場面は、京都の認知症医療とケアに新しい形が与えられていくことを予感させ、認知症の人が排除されない社会を幻視する瞬間になりました。つどいはその橋頭堡であり、京都文書は道標としての役割を担うものです。

つどいから一年、既に京都では、新しい実践が始まっています。

□ 私たちの前に広がる新しい風景 (新しいケアの登場)

「切れ目のない連続したケア」というスローガンがあります。しかし京都文書は「入り口問題」の描写と分析を通して、私たちの社会が「初期で軽度の認知症の人に対するケアを欠落させている」ことを描きました。京都では、こうした問題を机上の空論ではなく、本気で解決しようとする動きが始まっています。たとえば 2012 年 9 月に開店した「オレンジカフェ今出川」のように、初期の欠落を埋めて切れ目のない連続したケアを提供する「新しい認知症ケア」を模索する実践がその一つです。そこでは、利用者とスタッフとの関係も従来のものとはまったく異なったものとなっています。また、京都府看護協会は「急性期病院における認知症の身体合併症問題」への取り組みを開始しました。認知症の人の身体合併症問題は「入り口問題」の重要な一つですが、この問題を解決するための最初の一步が刻まれたこととなります。さらに、中京区認知症連携の会が作成したマンガリーフレット「おばあちゃんが認知症になった」が公開され、認知症の疾病観を変えるための魅力的な手だてが誕生しました。認知症医療やケアに

留まらず、認知症の人との関係や私たちの社会の在り方をも射程に入れた新しい試みです。まだ萌芽の段階に留まるものもありますが、こうした新しい試みは既に周囲に大きな影響を与え始めています。新たなエネルギーを背景に京都のケア風景は確実に変わり始めました。

このような取組のうち、新しい認知症ケアの可能性を示すものの一つとして、「オレンジカフェ今出川」の風景を紹介します。

—寛ぎの時間の中で—

京都御所の近くに毎週日曜日、若年性認知症の人々を中心に、初期の認知症の人が集まる場所ができました。「オレンジカフェ今出川」と名付けて私たちが運営する認知症カフェです。そこに集う人々は誰が認知症の人で、誰がスタッフなのか、まったくわからない寛ぎの中で、お茶を飲み、談笑し、散策に出かけていきます。常連客の70代の元営業マン Aさんは、認知症が始まって外出もめっきり減っていたとのことですが、得意のデッサンをしながらスタッフと話しているうちに、「ここでこのような出会いがあって楽しく過ごせたので、こんな病気になってよかったわ」と心境を語っています。Aさんは日本全国、北から南までの焼酎の銘柄をそらんじ、営業トークさながらの頓知の利いた流暢な会話でスタッフの心もほぐします。50代で発症し2年が経つ Bさんは、回数を重ねるごとに家から持参する荷物が増えてきました。カフェで会話をしたり、御所を散策したりする中で、Bさんの歴史趣味が刺激され、スタッフに見せる書籍や地図が荷物に加わったためです。そのおかげで御所散策ツアーは豊かな樹木による森林浴とともに歴史を振り返る、含蓄あるものとなっています。そんな Bさんはスタッフに「あんたたちは僕を元気づける人やね！」とも言っています。60代半ばで発症した Cさんは、発症後数年の経過のためトイレ動作や弁当箱のフックを開けたりするのにスタッフのちょっとした見守りが必要ですが、企業で社員教育に携わっていた経歴を生かして、学生スタッフの就職や恋愛の相談に乗っています。Cさんの妻はこの2年間、一時もそばを離れようとしないうちに Cさんとの生活に神経が参っていましたが、カフェに通ううちに「自分が離れても大丈夫」ということに気がついて、お茶を飲んだ後、スタッフに背中を押されて一人でショッピングに出かけていきます。そして、2～3時間ののち、晴れ晴れとした気持ちで戻ってこられます。70代半ばの Dさんからは「私は今、高齢者マンションに住んでいて行事もありますが、満たされないんですよ。そんな時、そうや、オレンジカフェに行ったらいいんや、と思うんです。ここがあるとというのは本当にありがたいことなんです」という声も聞かれます。Dさんは同じ話の繰り返しが目立ちますが、おしゃれで多趣味な女性です。

【認知症の人と家族の会会報「ぽ～れぽ～れ」2013年1月号
京都文書のこころ「認知症の疾病観を変える」(武地 一)より抜粋】

□私たちの前に広がる風景（京都で、日本で、そして世界で）

昨年の「第一回つどい」と「京都文書」は、京都の認知症ケアに一つの区切りをもたらし、今後の方向性を明示するものとなりました。それから一年が経過し、京都では認知症問題に強い焦点があてられるようになり、いよいよ「京都式地域包括ケア」の大枠が決定する重要局面を迎えました。「1,000人が集まれば京都を変えられる」、私たちがしようとしたことは、「認知症の人が排除されない京都を創る」ことに向けた懸命の跳躍だったと言ってよいかもしれません。針の穴を通すような奇跡が連鎖し、いま京都は旬を迎えています。

ただ、ここには「不思議な同時性」が介在します。

2012年2月に京都文書が出された時には、それは京都だけの「小さな物語」に過ぎませんでした。私たちの問題意識は、自分たちが身を置く認知症医療とケアの現場から生まれていました。ところが、4月になるとWHOから「認知症は公衆衛生（保健）の優先課題」と題する重要なレポートが公表されます。WHOが認知症だけをテーマにした初めての報告書です。そして6月18日には国の基本文書となる「今後の認知症施策の方向性について」（6.18文書）が続きます。この辺りから私たちの周囲の風景は変わり始めます。時系列に並べたときの「2-4-6連鎖」は、京都のできごとが日本と世界に波及しているかのような錯覚を与えます。京都の動きが、日本だけでなく海を隔てた世界と呼応し合う「不思議な同時性」に私たちは立ち会っています。認知症ケアが「歴史的転換点」を迎えている証左と言うこともできるかもしれません。つどいは京都の磁場を変えました。そして、それは日本だけでなく世界と連動しており、私たちの前に広がる風景は、瞬く間に「大きな物語」へと姿を変えました。

□京都式オレンジプランの策定（第二回つどい開催に至った理由）

いま京都では「認知症総合対策推進プロジェクト」の作業が急ピッチで進められています。二つの作業部会に分かれ、検討作業がすすめられています。この5月には「最終報告書」がまとめられ、それを基に「京都式オレンジプラン」（認知症施策5か年計画）が策定され、2018年3月までの京都の認知症ケアの骨格が決定していきます。昨年の2月には、「オレンジプラン」という言葉はどこにも存在していなかったことを考えると隔世の感があります。京都府がすすめる「京都式地域包括ケア」の中で、それが立ち上げられた2011年においては、認知症問題には十分な光があてられていたとは言えません。そのことへの危機感が第一回つどいの開催を決意させた理由の一つでもありました。ところが、昨年のつどい以降は、認知症問題は京都式地域包括ケアの中核に位置しているようにさえ見えます。わずか一年で状況は大きな変化を遂げています。つどいが京都の磁場を変え、2013年は京都の認知症ケアにとって時代を画する年になります。京都文書を世に問うた者の責務として、私たちは京都式オレンジプランに対する責任を果たさなければなりません。そして、そのチャンスは施策が立案される今しかありません。残された時間はごくわずかしかない、それが第二回つどいを開催するに至った理由です。

□ワーキングチームの始動

新しい動きを始める起点となった昨年の「つどい」からわずか一年で、「京都式オレンジプラ

ンの作成」という大詰めの局面を迎えています。今回は京都文書に具体的な形を与える作業が求められますが、それは認知症を生きる人たちからみた地域包括ケアに具体的な形を与える作業に他なりません。デルファイ法を用いて私たちが描きあげた「欠落」を埋めて、認知症の人たちが排除されない京都、すなわち「認知症になっても地域の中で今まで通り暮らし続けたい」という彼らのささやかな願いに応えられる京都をつくるのが「2012 京都文書からみたオレンジプラン」に求められる水準です。

では、何が必要か。

一つは、つどい後の「新しい風景」に明確な言葉を与える作業でしょうか。そのためには「京都・日本・世界における新しい動き」を取り込むことが前提になります。もう一つは、新しい実践の言語化でしょうか。一步を踏み出した後の宿命でもありますが、「多様化」と「細分化」の問題があります。ここをうまく共有しないと一緒に全体像を描くことが難しくなります。変動の時期の常ですが、自分たちの変化を対象化しきれずに、言語化作業が後れをとっているところもあります。そこで、昨年のデルファイ法に変わる現状分析の手法として、2013年1月に「10のワーキングチーム」を起動しました。

チームによって進捗状況に差がありますが、その作業はまだ途上にあります。その作業が進むにつれて、「2012 京都文書からみたオレンジプラン」は完成度をましていきます。したがって、今回の文書が最終版というわけではなく、今後ワーキングの進捗状況によって、随時改訂がなされていく予定です。今回の文書には、ワーキングの作業を十分には反映できていません。そして、本日のつどいに参加された方の意見も吸収しなければなりません。

【10のワーキングチーム】

1. 認知症ケアパス
2. 初期集中支援チームのイメージ
3. 認知症カフェの類型と機能
4. 医師のための認知症ガイドライン
5. 認知症ライフサポートモデル
6. 本人支援と家族支援
7. 後見制度と医療同意
8. 終末期ケアと権利擁護
9. 最終年度の成果指標（アウトカム）
10. 海外の認知症国家戦略および主要文献の整理と解説

□私たちの財産（京都のアドバンテージ）

さて、「第一回つどい」がしたことは何か。

一点目は、デルファイ法を援用して認知症医療とケアを数量化する手法を開発したことです。この経験は、「京都式地域包括ケア」のモニターを可能にしました。そして、京都式オレンジプランが策定される現在の状況においては、その経験は一層大きな意味を持つようになっています。二点目は、職種・職域の垣根を越えて専門職と家族が分析作業を共有した経験です。今後の京都の認知症医療・ケアを検討する核が残りました。三点目は、1,000人を越える人々が一堂に会した経験です。一人ひとりの英知を結集すれば京都の認知症医療とケアを変えられると

いう確信を残しました。

私たちは、こうした財産を駆使して、京都式オレンジプランに向かいます。

京都文書の最後は、「認知症を生きる人たちからみた地域包括ケア、それは認知症の人を地域から排除しないケアのことでもある。それは既に私たちの射程に入っており、それを京都式地域包括ケアの中で形にしていくことが私たちの責務である。私たち一人一人の力を合わせれば、京都の認知症ケアを変えることができる。それは、認知症ケアの確立を希求する連綿とした流れが本日のつどいへと収斂していく過程を経て、私たちの中に形成されていった確信である。」と結んでいます。

□2012 京都文書からみたオレンジプランとは

オレンジプランには、その最終年である 5 年後の認知症ケアの明確なイメージが描かれなければなりません。そして、それが画餅に終わらないためには、その実現に向けたロードマップが提示されなければなりません。京都文書は、「認知症を生きる人からみた地域包括ケア」の言語化を目標に書かれたものです。ですから、京都文書からみたオレンジプランとは「認知症を生きる人からみたオレンジプラン」に他なりません。

私たちは、認知症の人たちがこのように思えることができればそのケアの体制を評価できるとする項目を「認知症の人にとっての認知症ケア 12 のアウトカム」として作成し公表することが必要と考えました。「認知症施策推進 5 か年計画（オレンジプラン）（平成 25 年度から 29 年度までの計画）」実施を前に、その 骨子としてのプランをもとに「方向性」に示されたサービスを現実のものとするためには、認知症に関わるすべての人・組織・資源（リソース）に共有される理念が必要だと考えられるからです。この声明では英国認知症国家戦略にならって、認知症を持つ「私」が認知症ケアの成果（アウトカム）を語るという、いわば終わりから始める訴求力のある形式で統一し、12 個に絞り込まれた項目の一つ一つは、当事者の思いを代弁する介護者家族のかたがたの、こうあってほしいという切実な要望であり、いいかえれば今はまだ十分実現していないという現在の状況を示しています。今回の声明は「彼・彼女からみた認知症ケア」をテーマにした第一回のつどいで刊行された京都文書の中にある、当事者の声を基礎に加筆編集してまとめました。「アウトカム」はその評価実現に向けて多職種の連携、地域の関わり、行政の協力など、自治体あるいは国家的な取り組みにつながります。本来ならば、アウトカムはオレンジプラン策定時に国家戦略として構想されるべきですが、オレンジプランにそれが抜けています。このことに私たちは、問題意識をもち、自分たちの手で認知症に関わるすべてのひと・団体に受け入れられ、その 5 年の役目を終えるまで活用され続けられるものを作成することができれば、5 年後の終着点から描き直すことで、縦割りの効率的な悪さを解消し、断片化を起こした孤立した活動をつなぎ止め、より実効性のある統合されたケアの体制を作ることに役立つと考えます。その意義は決して小さくないと考えました。この声明では 12 個ですが、そこにいたるまでに織り込まれた人数と労力と時間を考えると、多くの認知症の人の代弁者が集まって作り上げたひとつの声語る 12 の物語といえるかもしれません。どうでしょう。ひとつの声が聞こえるでしょうか。12 のうちのどの物語も欠けては困ると思っている、そのひとつの声が、できるだけ多く方の耳目に触れ、この国の認知症ケアを変えてゆく力になることを祈ります。